

## 口演発表（第4会場） 発表7分—質疑3分

2月15日(日) 11:35~12:05

### O-2-55 口腔内スキャナーを用いたインプラントメインテナンス患者への応用

Application of intraoral scanners for implant maintenance patients

○茂野 光<sup>1)</sup>,瀬戸 宗嗣<sup>2,3)</sup>,廣安 一彦<sup>3)</sup>,上田 一彦<sup>2,3)</sup>,宮崎 晶子<sup>4)</sup>  
○SHIGENO H<sup>1)</sup>, SETO M<sup>2,3)</sup>, HIROYASU K<sup>3)</sup>, UEDA K<sup>2,3)</sup>, MIYAZAKI A<sup>4)</sup>

1) 日本歯科大学新潟短期大学専攻科歯科衛生学専攻,

2) 日本歯科大学新潟生命歯学部歯科補綴第二講座,

3) 日本歯科大学新潟病院口腔インプラント科,

4) 日本歯科大学新潟短期大学歯科衛生学科

1) Graduate Programs, The Major of Dental Hygiene, The Nippon Dental University College at Niigata,

2) Department of Crown & Bridge Prosthodontics, The Nippon Dental University Life Dentistry at Niigata,

3) Oral Implant Care Unit, Niigata Hospital, The Nippon Dental University,

4) Department of Dental Hygiene, The Nippon Dental University College at Niigata

I 目的：近年、歯科においてデジタル技術の進歩は目覚ましく、診断、手術支援、補綴歯科治療などに多大な変革をもたらしている。しかし、メインテナンスへ移行後の患者への活用方法には不明な点も多い。本研究の目的は、口腔内スキャナーによる画像と口腔内写真を用いて口腔衛生指導(OHI)を行い、歯科に関する専門的な知識の差による理解度の違いを調査し、学生教育への効果やインプラント患者を対象としたOHIへの応用について考察した。

II 材料および方法：対象は本大学の第1学年30名および第3学年30名の計60名で、あらかじめ本研究の目的と収集する資料について文書を提示して説明し、同意を得たものを対象とした。OHIを実施するにあたり、指導用資料として染色前後の口腔内スキャナーで作成した画像と一眼レフカメラで撮影した画像を作成した。さらに、模擬患者のPlaque Index, O'LearyのPlaque Control Record, Probing Depth, Bleeding On Probingを収集した。撮影した画像をもとに、対象者を口腔内スキャナーの画像によるOHIと口腔内写真によるOHIを3分間ずつ計6分間で行った。なお、どちらを先にするかはランダムに群分けした。OHI後、Googleフォームを使用して4分程

度のアンケートを実施した。それぞれのOHIによる理解度や満足度の抽出はテキストマイニング法および歯科の知識の差による結果の違い(学年間での違い)の有無はカイ二乗検定を行った。

III 結果：口腔内写真と比べ、口腔内スキャナーによる画像が分かりやすいと選択した者は第1学年28名、第3学年28名であり、第1学年と第3学年との間に差は認められなかった。一方で、歯肉の状態に関しては口腔内写真の方が分かりやすいとしたものが多く、口腔内スキャナーによる画像が分かりやすいと選択した者は第1学年22名(73.3%)、第3学年8名(23.3%)であり、第1学年と第3学年との間に有意差が認められた( $p < 0.05$ )。

IV 考察および結論：口腔内環境を維持するためには、日々のセルフケアだけでなく定期的なプロフェッショナルケアが有効であり、モチベーションの維持、向上が重要である。本研究において、口腔内スキャナーによる画像を用いたOHIは、口腔内写真による画像を用いたOHIと比べ患者のモチベーションの向上や動機付けに有用であることが示唆された。

日本歯科大学新潟短期大学倫理審査委員会承認 承認番号 NDUC-125

### O-2-56 長期経過症例のメインテナンス 加齢に伴う患者への対応の変化について

Maintenance of Long-Term Implant Cases and Age-Related Changes in Patient Management

○関塚 美幸, 川端 秀男

○SEKIZUKA M, KAWABATA H

東京形成歯科研究会

Tokyo Plastic Dental Society

I 目的：インプラント治療において、全身状態の安定および口腔内局所の安定は、長期予後を左右する重要な要素である。当院では1996年の開業以来インプラント治療を実施しており、定期的なメインテナンスを継続している患者では概ね良好な経過が得られている。加齢に伴い患者の全身状態や生活背景は変化し、それに応じてメインテナンス時の対応や注意点も変化する。本報告では、当院におけるインプラント患者のメインテナンス内容と、加齢に伴って生じる臨床的变化について検討する。

II メインテナンスの概要：メインテナンス術式は、患者の年齢、性別、欠損歯数、咬合様式などにより異なる。欠損部位が少ない症例では、インプラント部に加え、残存歯のカリエスおよび歯周病予防が重要となる。当院ではこれらの要素を踏まえ、個々の患者に応じたメインテナンスプログラムを実施している。当院では、1996年よりメインテナンスを実施しており、残存歯数、患者の年齢、補綴様式等により咬合状態、ペリオ予防、カリエス予防など口腔状態に応じた対応をしている。全身疾患を有している患者には、担当医と密に連絡をとり検査データ等を共有している。セルフケアの状態によっては、マテリアルを含めた補綴方法の改善、ブラッシングしやすいカントゥア、

咬合面形態付与等考慮している。

III 経過：長期にわたりメインテナンスを継続した症例の中には、全身状態が著しく悪化した症例も認められた。しかしながら、適切なメインテナンス介入により、多くの症例でインプラント周囲の局所状態は良好に維持されていた。

IV 考察および結論：長期的にメインテナンスを継続している患者の中には、全身状態に変化が生じても、インプラント部および口腔内全体の状態が安定している症例が認められた。良好な長期予後の獲得には、継続的なメインテナンスが必須であり、患者の加齢に応じて術式や重点項目を柔軟に変化させる必要がある。